

川崎市郊外で見つかった 古墳時代の遺跡

片田 正人

川崎市北西郊外 つまり溝の口の地質調査所近傍は人口増加率がきわめて高く この点に関しては日本でも有数な所である。

このあたりは 高さ50mほどの台地と沖積平地が入り組んでいる地帯であって 家や工場が集まっている平地は多摩川が堆積した砂礫層であり 台地（下末吉台地）は第三紀層（高津層）とその上をおおう厚さ数mの赤茶けた関東ローム層 から成り立っている。そして 畑が広がり 農家が点在するにすぎなかった台地の上は 最近住宅が並び始め 格好なベッドタウンとなりつつある。ところがこの台地には ずっと昔から人が住んでいたらしく いくつかの古代遺跡が見出されている。

最近 南武線溝の口および津田山駅北東方の台地 津田山 にはQ社が大規模な団地を建設中であるが その際にもいくつかの「横穴」が見つかった。場所は笹や雑木が密生した平凡な丘陵の斜面で すぐそばの小道を毎日通る人も まったく気がつかなかったのだが パワーシャベルで表土を削り取ったあとから こつぜんと人工の穴が表われたのには目を見張った。

すでに古くから 津田山の南東 4km の台地の縁にある 子母口の貝塚 はよく知られている。

この遺跡も今では団地に囲まれてしまい 夏草の繁るにまかせ 朽ちかけた立札でもなければ 誰も気がつかないであろうし 気がついていも 空地同然ではその価値を

知る人も少ないであろう。子母口貝塚は 考古学的にいうと 石器時代 縄文早期 のものに属し 古代遺跡としては比較的古く 数千年前のものである。

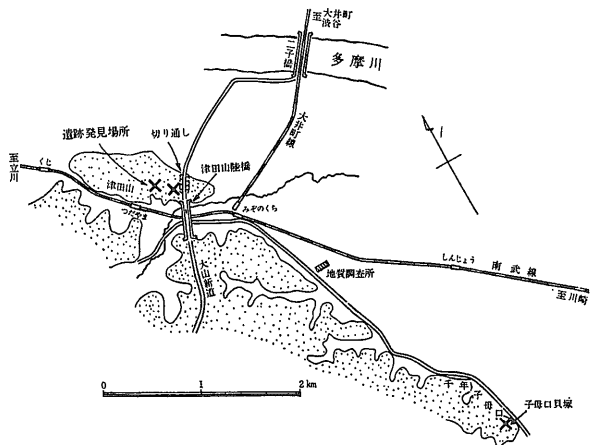
今回津田山で見出された遺跡は 2カ所で いずれも第三紀層をうがった横穴である。ただし ここで横穴の存在が確認されたのは今度が初めてではなく 従来も時々近隣のうわさにのぼっていたし 高津地区の考古学愛好者によって貴重な資料がいくつか集められていた。が今回のものほどみごとな 誰の目にもすばらしい物が見出されたのは初めてである。

その1カ所は 津田山台地から溝の口駅への拡張道路の途中で 写真のように 4つの穴が集まっていた。内面はいずれもきれいに削られており 幾何学的な球面や平面で囲まれて みごとなシンメトリーを作っている当時としては随分時間をかけてていねいに仕上げたものに相違ない。4つとも少しづつ形式が異なっているけれども いずれも ちょうど酒徳利をたてに2つ割にして伏せた様に 入口はせまく奥に 3畳ほどの室がある点は共通していた。奥行は3mほどである。

床には多摩川から運んできたらしい中生層のこぶし大の丸石が敷きつめてあり 1つの穴には 石の間に若干の人骨片と青銅製の耳輪などの装身具が埋まっていた。人の住んだ気配は少しもないから 墓の一種と考えるべ



津田山の丘陵から 溝の口をへだてて子母口に続く丘陵を望む
津田山丘陵の上面は 古くから赤松と笹の原野であったのを 戦時中は開かんされ また高射砲陣地が作られた



発掘位置図

きであろう。そういえば 内部の壁面は全面的に黒く煤けていたが これは長期間にわたって灯明をともしたためであろう。ただし残念なことに この壁は子供たちの絶好な黒板代りとなり ブルトーザの隙をねらって飛び込んだ「研究者の卵」によって あっ という間に落書きだらけにされてしまった。千年以上 せつかく本来のままの姿で保存されていたのに わずか2・3日で宇宙時代の壁画を書き加えてしまった。

もう1カ所の遺跡は 現在は再び埋められてしまったが 津田山駅側の山腹に発見されたもので これについては早大の考古学研究室の調査が行なわれた。やはりにたような規模のもので 床には丸石が敷きつめてあり6体の人骨——女4体と男2体——が埋葬されていた。早大玉口時雄講師の話だと 人骨はきわめて保存がよく人骨と共に数10個の鉄矢じり・2本の直刀・シカの骨の腰飾り・銀の耳輪などが確認された。その上 いちばん奥には石棺が安置されていたという。作られた時期は約1500年前で 横穴古墳としては最も古いものの1つであり 高塚古墳から横穴古墳へ移った当時のものであるという。

また津田山の上——といっても平垣地であるが——ではブルトーザが表土を掻いて行くにつれて 畑の土の下から 石製の手斧(?)・矢じり・土器のかげらなどが続々と掘り出され それを聞きつけて シャベルや移植ゴテを手にした小・中学生が 一時は ちょうど潮干狩のように工事現場を歩きまわった。掘り出されたものには大して立派なものはないが 日常生活用品と思われるものが多いことからみて 明らかに住居を構えた跡と察せられる。

て 子母口貝塚の存在から考えると 溝の口を中心とする丘陵地には 数千年前には すでに人が住みついていたことは確実である。そのころは 古地理的にみると 現在の沖積平地の部分は遠浅の海であって 住人たちは海岸に居をかまえ 海辺で貝を拾ってきて 食卓をにぎわしていたのであろう。

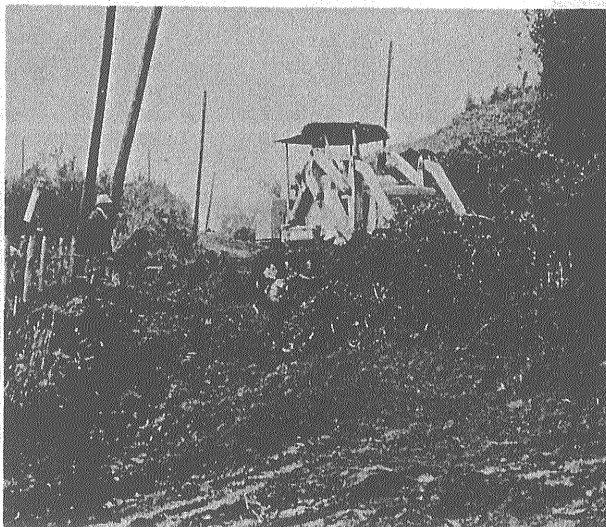
今回 見つかった遺跡が約1500年前のものとするれば 考古学的には 古墳時代 と呼ばれる時代である。歴史上では 千円札でおなじみの聖徳太子の時代であって それからややあって いわゆる奈良朝時代が開花する。

ちなみに 古墳の代表である仁徳陵で名高い仁徳天皇が 313年～319年(西暦) 大化の改新の始まったのが 645年 奈良に都を移したのが710年である。そして およそ300年～600年が古墳時代といわれる。植輪が作られた時代であり 万葉集の歌にもこのころのものが 多い。

そのころになれば 地形的には現在とほとんど変わる所がなかった。ただ 現在の低地平野部は 一面に河原と湿地で そのままでは 人の住居を設けるには不適當であつたに相異なる。それゆえ 部落の大半は台地の縁に点在していたのであろうし 道もまた同様であつたろう。当時の街道—今の東海道に相当する東西の連絡路—は おそらくこのあたりの台地の上を曲りくねって通っていたものと想像される。

一般庶民の住居は 草を刈り 土を踏み固めた所に木の枠を組んで草の葉でふいただけの簡素な小屋で ちょうど今の炭焼小屋のようなものであつた。そして 権力者だけが床をあげた家に住んでいた(神社建築にはその形式が残されている)。

今回みつかった横穴は 装身具の種類などからみて



津田山への小路は パワーシャベルやブルトーザで拡張された。表土やローム層は見るとげずり取られ、ふもとの部分では 高津層も一部けずられた

その権力者一族のものであることには間違いない。 そうですね ローム層中の所々に 丸石が1m四方位の広さに敷きつめた所が出てきたが これが当時の一般の人々の土葬のあとではなからうか。 遺品や人骨は何も見つかってはいないが。

当時 大化の改新から奈良朝時代にかけての日本は大陸の影響を強く受けながらも しいだいにわが国固有の文化が栄え始めていた。 政治史上から見ると国家の統一が達せられつつあった。 また美術史上から見ると 法隆寺で代表されるように それ自体では ほとんど完べきの域に達した作品をも生み出しつつあった。 そして現在の大阪や奈良を中心として

“あをによし 奈良の都は 咲く花の
匂ふがごとく 今さかりなり”

と詠まれたように 一見して絢爛たる社会が作られつつあり 人々も “御民我 生ける験あり 天地の榮ゆる時に 云々” と日々の生きがいを感じていた。 しかしながら このはなやかさも楽しさも つまるところは中央だけの また上流階級だけのものであり 一歩地方へ出れば 皇子の身をもってしても

“家にあれば 筥に盛る飯を 草枕
旅にしあれば 椎の葉に盛る”

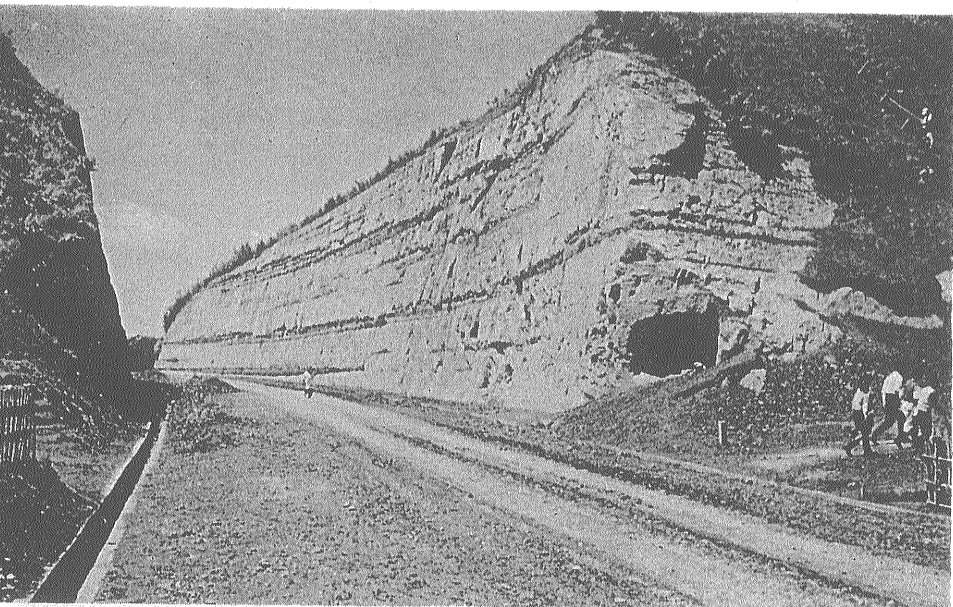
というように 物質的にもみじめな生活を余儀なくされ一般農民にいたると

“…直土にわら解き敷きて 父母は枕の方に 妻子どもは足の方に 囲みいて…”

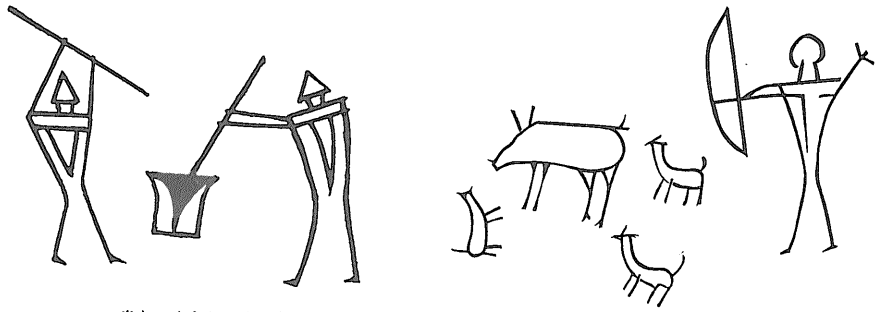
の歌からわかるように まだまだ低い段階に止まっておられ しかも奴隷に近い生活を送っていた。 このような状態は平安朝時代にまでも残っていたといわれる。

溝の口付近の当時の住人も 椎の葉に飯を盛り わらを敷いて寝を取った連中が大半で それらの人々が 床のある家にすみ 銀や青銅製の装身具を身につけた権力者を中心に 黙々とその日その日を過していたのであろう。 しかし、はなはだ残念なことに 権力者の遺品や遺跡は 現在目のあたり見ることができのに反して一般庶民の生活状況を示すものは ほとんど残されていないのである。 おそらく 質的にも量的にも1000年以上の保存に耐える生活用品なり装飾品を 持っていないからであろう。

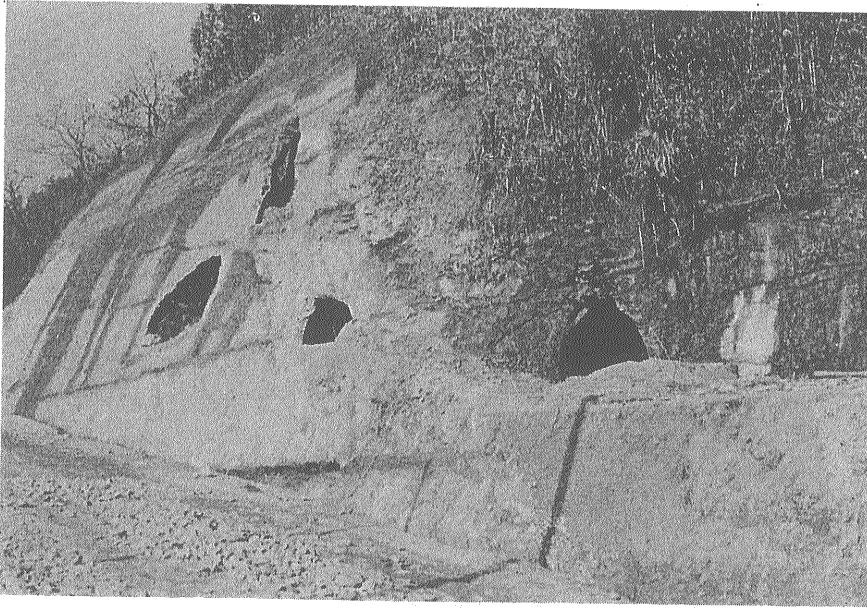
- (後記)
- (I) この「金工」を草田蔵・前田・あ田・たつて日美術大系9巻参照
「した」ま4試いた8月津田山金ので器本多古がの発掘見報
1962年芸だの奈の末朝の津田山金ので器本多古がの発掘見報
業工た後あ著る川崎で属の巻(上)多摩行史(筆者は)
- (II) 稿を草田蔵・前田・あ田・たつて日美術大系9巻参照
「した」ま4試いた8月津田山金ので器本多古がの発掘見報
1962年芸だの奈の末朝の津田山金ので器本多古がの発掘見報
業工た後あ著る川崎で属の巻(上)多摩行史(筆者は)



津田山丘陵の断面 新
大山街道の通称「切り
通し」は高津層の模
式的な断面を示して
いる白っぽい所が砂
岩 黒っぽい所が頁
岩で上面の草木の茂
っている所(この写
真にはよく示され
ていない)が関東
ローム層と表土



米をつく人と 狩をする人の絵 銅鐸の表面にうき廻りの線で描かれているもの
当時の風習をよく伝えている



高津層中にうがたれた横穴
右側の2つは 入口が見えており
左側の2つは 入口はけずり取ら
れて奥の部屋が露われている 細
部は 破損しているが 現在もほ
ぼこの状態のまま残っている(“切
り通し”の津田山陸橋ぎわを100m
ほど津田山団地方面にのぼった所)

横穴の奥 一番奥は 垂直
な平面で終わっているものと この
ように曲面で終わっているものが
あった これはみごとな半球面
で 内部はすすけている 写真
ではややゆがんで見えるが 実際
は完全に近い対称を示している
なお 内部の土砂は工事中に入っ
たものである また 底の幅は
3m弱である

